

病気療養児に対する学生ボランティアによる学習支援の可能性

(特別支援教育講座) 檜木暢子

(特別支援教育教員養成課程) 山下祥代

Possibility of Study Support for Children with Medical Treatment by College Student Volunteer

Nagako KASHIKI and Sachiyo YAMASHITA

(平成26年6月16日受理)

抄録：長期入院等の病気療養児は家庭や地域から離れて生活していることから、治療等による学習の空白や遅れが生じることが多い。また、家族から離れて治療を受けているため、取り残される不安や焦燥感、孤独感を抱くことも多く、心理面での支援を必要としている。本研究では療育施設における入院児に対して学生ボランティアによる学習支援活動の有効性について、受入側である療育施設職員に質問紙調査を行い、学生ボランティア及び受入れ担当職員に対し面接調査を行った。その結果、療育施設職員が対応しきれない余暇時間の支援を学生ボランティアが補い、病気療養児への学習支援として有効である可能性と、その要件として子どもに視点をおいた活動の継続と職員との信頼関係の構築が示唆された。

キーワード：病気療養児 (Children with medical treatment)、学習支援 (Study support)、
学生ボランティア (College Student Volunteer)

第1章 問題・目的

(1) 病気の子どもたちへの学習支援

学校教育法では継続して医療又は生活上の規制もしくは管理が必要な子どもを病弱教育の対象とすると定めている。文部科学省の「病気療養児の教育について」では「近年における児童生徒の病気の種類の変化、医学や医療技術の進歩に伴う治療法の変化等によりその必要性がますます高まっており、また、入院期間の短期化や入院を繰り返す等の傾向に対応した教育の改善も求められている」(文部省,1994)とされている。さらに近年の医療の進歩や制度の変革により、病気療養を必要とする子どもの入院期間は短縮される傾向にある(全国病弱教育

研究会,2013)。一方、病気の子どもの成長発達については、齋藤らが「遊びは子どもの健やかな成長発達に欠くことのできないものであるが、治療が最優先される病院環境においては遊びの援助はなかなか難しく、十分とはいえない」(齋藤ら,2010)と述べているように、治療・療養の場では既定の仕事に追われ医療・福祉スタッフが教育、遊びの支援を行うことは困難である。病気療養児は家庭から離れた環境で、家族や友だちから取り残される不安や焦燥感、治療への不安、孤独感などを抱いており、学習面、心理面での支援を必要としている。(谷口,2009)このような現状に対して、学習及び余暇活動を支援する1つの方法としてボランティアの導入

が考えられる。谷川らは「病院ボランティアは、職業的・資格的な役割を担っていない病院における唯一の責任ある素人である」（谷川ら,2009）と述べており、病院ボランティアには病気の理解や健康面、心理面への配慮等、一定の資質が求められている。

土居は特別支援教育関係ボランティアの課題の解決の方途では重要な役割を果たしているのが学生ボランティアだと述べている（土居,2011）。愛媛大学教育学部では地域連携実習として、松山近郊の小・中学校において学習支援を行っている。これらの学生は学習支援及び発達段階についても一定の知識をもっており、治療・療育の現場でのボランティアスタッフとして、有効な活動ができると考えられる。

これまでの研究では、河井が学生ボランティア活動に参加の有無による学習の差異について研究をしている（河井,2012）。また、伊藤は入院児の家族を対象に（伊藤, 2009）、福井は看護者を対象に病院ボランティア活動のニーズや役割について研究している（福井,2002）。藤原は小児医療における病院ボランティアの分析を行っている（藤原,2012）。病院・施設等でのボランティア活動は、ボランティアと受け入れ先、対象者の3者で活動を展開されているが、ボランティアと受け入れ先のボランティア活動に関する意識を比較した調査研究は見受けられなかった。

（2）学生による学習支援ボランティアの取り組み

A療育施設では学生による学習支援ボランティア活動が行われている。この活動は、愛媛大学教育学部で地域連携実習に積極的に参加し、特別支援教育を学ぶメンバーで2012年8月から継続的に行っているものである。学期ごとに職員との話し合いの場を設け、対象児や希望する活動・対応について確認を行っている。また、毎回の活動後に報告書を提出している。

本研究では地域の療育施設における学生による学習支援ボランティアについて、①ボランティア受け入れ施設に対する意識調査、②ボランティアと受け入れ担当職員両者に対するボランティアの導入に関する意識調査を行う。その結果から、学生ボランティアに求められている事項を明らかにし、学生ボランティアの有効な活用や有益な活動について検討する。

第2章 アンケート調査

1. 目的

ボランティア受け入れ側が一般・学生ボランティアに期待している事項や具体的な活動の内容を明らかにすることを目的とする。また、入院・療育施設での支援ニーズにあったボランティア活動の展開方法を検討する。

2. 方法

（1）調査方法

A療育施設で働く職員を対象に質問紙調査を行った。調査期間は2013年9月下旬から2013年10月上旬とし、質問紙はA療育施設のボランティア担当者から各部署に配布・回収を依頼した。アンケートは100部配布し、84部回収した。表1には、部署別の回収数を示した。

表1 部署別の回収数

	診療科	重心棟	肢体棟	通所	事務	不明
回収数	17	32	24	6	3	2

（2）調査内容

調査内容はA療育施設内における、ボランティア活動の利用状況やニーズ、学生ボランティア活動の印象である。質問紙は、(1)回答者プロフィール、(2)A療育施設内におけるボランティアの必要性、(3)A療育施設内におけるボランティア全般について、(4)A療育施設内における学生ボランティアについての4部で構成した。

ボランティア参加者の属性に対する希望、ボランティアに期待する活動については4件法（とても当てはまる・まあまあ当てはまる・あまり当てはまらない・まったく当てはまらない）を用い、平均点を比較した。

3. 結果

（1）職員が考えるボランティアの必要性

①ボランティアの必要性

どの部署においても90%以上がボランティアは「必要である」と回答した。そのうち、約40%が「状況による」であり、「必要ない」はいなかった。

②学生ボランティアの有効性

部署を一般・学生ボランティアに関わる入院棟と一

一般ボランティアに関わる入所棟、ボランティアとは関わりが少ない診療科・通所・事務(以後、診・通・事)の3つに分類して図1に結果を示した。入院棟は「有効である」という回答が80%で他の部署よりも高い値であった。

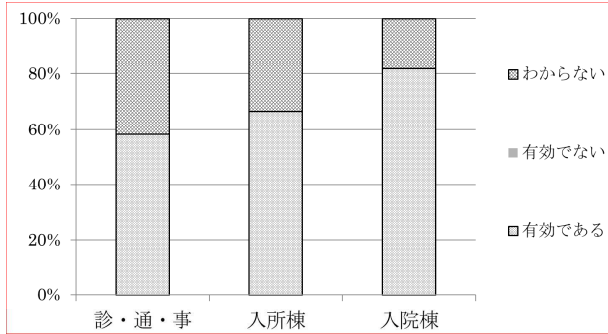


図1 職員が考える学生ボランティアの有効性

(2) ボランティア活動の対象

①活動の対象(複数回答)

「入院児」を挙げている人は68人(約87%)、「親」「兄弟姉妹」「職員」は14~15人(約18%)であった。「そのほか」には、「介護士」、「通所」等の回答があった。

②ボランティア参加者の属性に対する希望

表2に示すように各部署とも学生が参加する場合はある一定の知識を有していることが望ましいとの回答が多かった。一定の知識がある学生と資格をもっている一般の人との間には差はなかった。

③希望する活動内容(複数回答)

「行事」「児との関わり」を希望する人は全体の約85%、「家族と関わるもの」は、約25%であった。「個別学習」については入院棟と診療科では50%以上が希望しており、他の部署より10%以上高かった。

④一般・学生ボランティアに期待する具体的な活動項目

- <対象>

 - A. 子どもの話し相手になってほしい
 - B. 子どもの遊び相手になってほしい
 - C. 家族の話し相手になってほしい
 - D. 家族と一緒に活動してほしい

<接し方>

 - E. 子どもの病状および心理状態に応じて接してほしい
 - F. 生活意欲を高められる関わり方であってほしい
 - G. 気分転換になる関わり方であってほしい
 - H. 不安が軽減する関わり方であってほしい

<内容>

 - I. 子どもが楽しめる活動であってほしい
 - J. 宿題や学校の進度に合わせた学習補助をしてほしい
 - K. 個別の課題や受験対策など、上記J以外の学習をしてほしい
 - L. 着替え、移動、衣服の整理等、日常生活の支援をしてほしい

<時期>

 - M. できるだけ長く関われるよう、入院の初期から来てほしい

表2 各部署の職員が考えるボランティア参加者に対する属性の希望

ボランティア参加者	診・通・事	入所棟	入院棟
A.医療に携わる専門家(療法士、心理士等)を目指している学生	3.3	3.2	3.5
B.福祉、教育に携わる専門家(保育、教育等)を目指している学生	3.4	3.5	3.5
C.A,B以外の学生	2.7	2.6	2.8
D.福祉、教育に携わる専門家(保育、教育等)の資格をもっている、あるいは職についている人	3.2	3.5	3.6
E.得意分野を生かして支援したいと考えている人	3.5	3.5	3.4
F.継続して来ることができる人	2.9	3.2	3.5
G.様々な年代の人	3.1	3.3	3.3

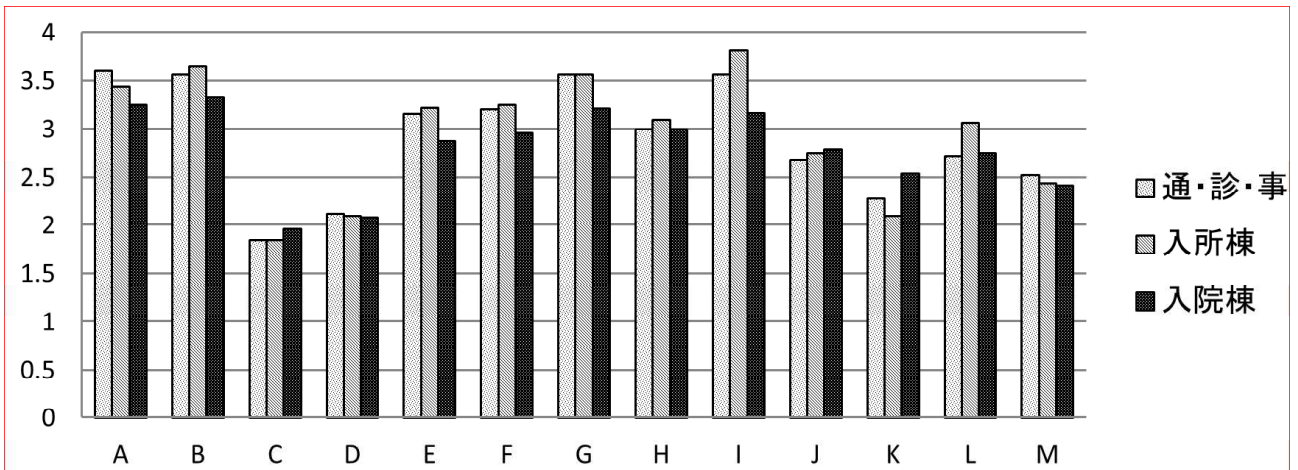


図2 学生ボランティアに期待する活動

図2 に学生ボランティアに期待する活動項目を示した。各項目について見るとボランティアの「対象」項目 A ～ D において「子ども」に関する項目 A、B が 3.5 点前後であるに対して、「家族」に関する項目 C、D は 3 点未満であった。また、全ての部署で子どもの心理状態に関わる項目 E ～ I の点が高い。学生ボランティアに期待する活動の中で学習支援に関する項目 J と K の 2 項目で、学生ボランティアを受け入れている入院棟の得点が他の部署より高かった。

⑤活動日数

全部署で「週に 1 日」が多く、次いで診療科と通所は「月に 1 日」が、入所棟と入院棟は「週に 2 日」が多かった。

⑥活動時間

1 回のボランティア活動の実施時間は、全体で「1 ～ 2 時間」が約 30 %、「2 ～ 3 時間」が約 30 %、「3 ～ 4 時間」が約 14 %であった。

4. 考察

ボランティアを受け入れる立場である療育施設において、ボランティアの導入について否定的な意見はなく、わからないという意見はあるものの、概ね導入に前向きであることが伺えた。ボランティアに求められている活動は、子どもの心身の状態に応じた活動が挙げられており、特に学生ボランティアに対しては、学習に関わる活動を期待されていた。

今回A療育施設でボランティア活動を行った学生は特

別支援教育を学ぶ一定の知識を有した学生であったことから、療育施設職員が考えるニーズに応じた活動が実施できていた。実際に学生ボランティアを受け入れている入院棟が他の部署よりも学生ボランティアが「有効である」の回答率が高いことから、学生ボランティアの導入は入院中の子どもたちへの学習支援に対して有効な担い手である可能性が示唆された。

活動の日程については、各部署で意見が異なっていたり、部署の中でも意見がまとまっていなかったりすることから、綿密な調整が必要となるであろう。特に学生が参加するボランティア活動は、授業等により時間の制約が生じるためより細やかな話し合い等が必要となることが考えられる。A療育施設で行われたボランティアは事前に、定期的な話し合いを開くことを決めていたためニーズに応じた柔軟な活動へと展開することができたのではないかと考える。

病気療養児への学習支援ボランティアの導入においては、次の 3 点が示唆された。まず対象児の健康状態、心理状態に合わせた活動が求められることから、ボランティアの条件として健康面や心理面に関する一定の知識をもっていることが求められている。次に、安全で安定した活動を行えるよう、事前に活動時間や日数、支援内容等の条件について参加者側と受け入れ側の綿密な打ち合わせを行うことが必要である。最後に学生ボランティアは学習に関わる活動を中心に活動を展開すること、対象児の身体面、心理面、環境等に応じて柔軟に学習支援の内容を工夫することが期待されている。

これらの条件を満たすことで病気療養児への学習支援導入が円滑に行われるであろう。今後は支援の質を向上させる要件を検討していきたい。

第3章 聞き取り調査

I 学生に対する聞き取り調査

1. 目的

参加者のボランティア活動参加前後の活動に対する意識の変化を明らかにし、ボランティア活動に及ぼす影響について検討する。

2. 方法

A療育施設において2013年10月から12月の間に学習支援のボランティア活動を始めた大学生2名を対象に半構造化面接を実施した。聞き取り内容は病気療養児を対象とするボランティア活動に参加する前と後での印

象、考えの変化等である。記録はICレコーダーを使用した。ボランティアを行う前と後での印象の変化を聞き取るため、ボランティア開始から約2か月後を目安に実施した。

H：大学2年生(20)、女性(2013年12月実施)

I：大学3年生(22)、男性(2014年2月実施)

3. 結果

<病気療養児のボランティアに参加しようと思った理由>は、H、I共に「将来の目標に関連するため」また、「希望する活動」については、Hは「自身の技術や興味、関心」に、Iは「活動内容や場所」に重点を置いているという回答であった。

<活動を継続する上で気を付けていること>

「子どもが求めているもの」という点が挙げられた。さらにHは「人間関係」に重点を置き、職員を「優れた

表3 学生に対する聞き取り結果

質問項目	カテゴリー	聞き取り内容
ボランティア参加理由	理由	・いろいろな子といる、という延長(会ったことがないような子に会ってみたい) (H)
		・将来の目標に関連するため ・知り合いはしゃべったりできるから普通だと感じていたけど、他の子はどんなのかなという疑問 (H)
	希望の活動	・将来特支の先生を目指しているが、肢体不自由や病虚弱にカテゴリーされる子どもと関わる経験が少ないため (I)
		自身の技術の向上 ・これまでの経験から得た子どもとの接し方で、どこまでいけるのか興味がある (H)
		自身の興味・関心 ・いろいろな経験がしたい→いろいろな子どもと仲良くなれるように (H)
活動内容 活動場所	・何がしたかったというよりも、子どもが何ができるのか見てみたい (H)	
	・学習支援と聞いていたため、宿題を見ればよい (I)	
想像との相違	子ども実態	・行ってみないと、どんなことをすればいいのかわからないと考えていた (I)
		・もっと大変な子どもが多いのかと思っていた (H)
		・なんで入院しているんだろうという子どもも多い (H)
		・意外と元気な子ども、今までの接し方で関わる子どもも施設にはいるんだと知った (H)
		・気遣いをすごくする子ども (H)
気をつけていること	ボランティア開始前	・寝たきりばかりかと思っていた(ピックアップされやすい) (H)
		・どうしてここにいるのかという疑問 (H)
	月2後カ	・いろいろな子がいるんだなと感心→特支を学んでいない人は混乱を起こすのでは? (H)
職員への態度		・失礼のないように (H)
活動後の	優れた関わり手	・邪魔にならないように (H)
		・この人となら子どもが仲良く遊べるんだろうなという認識を持ってほしい (H)
		・子どもを理解している人という認識→いろんなことを聞きたい (I)
活動後の	優れた関わり手	・特支で学ぶ考え方の違い (I)
		・子どもに関わる部分以外はあまり気にしてしていない (H)
活動後の	人間関係	・子ども自身の考えを引き出したい (H)
		・子どもが求めているものにマッチしているのか不安 (I)
活動後の	子どもが求めているもの	

関わり手」として見ていた。今後の活動に関して、Hは「人間関係」をIは「子どもが求めているもの」を重視していた。

＜職員に対する見方＞

Hは仕事の邪魔や迷惑にならないようにしたいという不安が主であったが、Iは職員を子どものことを理解している人であり、学びを得ようという考えが主であった。継続によりHはI同様、職員の子どもに対する関わり方に注目をするようになっていく。

＜意識の変化の理由＞

Hはさまざまな子ども達と関わった経験があったが、それと比較して「異なる環境で過ごすことで子どもの実態に違いが現れる」ことを実感していた。またHは「事前の知識により柔軟に違いを受け入れ次へ生かすことができた」話しており、「想像との相違」が意識の変化をもたらしていた。

4. 考察

学生ボランティア参加者のボランティア参加理由は「将来の目標に関連する」こと、つまり、参加者の興味関心によるものであった。ところがボランティアを続ける中で、Hは活動に関して初め自身の興味や技術、関心に重点を置き考えていたが、参加後には子どもの人間関係に重点を置いている。「想像との相違」でも述べられているように2ヶ月間子どもと関わることで、子どもの環境の特殊性に気づき子どものニーズに合わせた活動を考えるようになったことが要因であろう。また、Iは初め決められた活動内容や場所のルールといった形式に重点を置いていたが、参加後は子どもが求めているものを考えるようになっていく。2ヶ月間のボランティアの参加により、H、Iともに活動内容の視点が対象者に向けられている。「今後の活動」に関する回答は、この活動内容の視点の変化が影響していると考えられる。

「職員の捉え方」について、Hは参加後に優れた関わり手として捉えていた。これは、2ヶ月間職員と子どもの関わりを見たり、子どもと職員の密接な関わりを感じたりすることで、新たな気づきがあったのであろう。Iは参加前から優れた関わり手として捉えており、すでに小学校及び特別支援学校での教育実習を終えており、子どもの実態を把握するときには人的環境を考慮することが大切であることを実体験していたからではないだろうか。

2ヶ月間ボランティア活動を継続することで学生のボランティアの目的は定められたとおりに活動を行うことから、決められたことと合わせてよりニーズに合った活動を展開することへと変化した。また、子どもを支える職員に対して信頼を寄せるようになったと言えるだろう。

II 職員に対する聞き取り調査

1. 目的

A療育施設内で実際にボランティアの受け入れに関わっている職員から、一般・学生ボランティアの受け入れについて聞き取りを行い、受け入れによる意識の変化を明らかにしたい。

2. 方法

A療育施設で、肢体不自由児を対象とする病棟に所属している生活指導員Cを対象に2014年2月に約30分程度の半構造化面接を実施した。Cは病棟のボランティア委員でありB大学のボランティア担当でもある。質問内容は病気療養児を対象とする学生ボランティア活動を対象病棟で実施する前と後での印象の変化等である。記録は筆記によるメモで行った。

3. 結果

＜ボランティアに期待すること＞

ボランティア活動に対して、職員にできない部分の穴埋めを期待していた。具体的には、既定の職務に追われ時間や人手など物理的な余裕がないために子どもの余暇活動などを十分に充実させることが難しい点や、ボランティアの特技等を活かすことで余暇活動の内容を充実させることができる点、男性職員が少ないので男性のボランティアが参加することで子どもたちに多様な経験をさせることができる点などが挙げられた。

＜学生ボランティアの受け入れについて＞

A療育施設では、これまでの学生ボランティアが見学のみであったり活動が1回限りで終わったりしたという経験から、今回も活動が継続することはないだろうという不信感を感じている。しかし、B大学生ボランティアは2年間活動が続いたことで、この不信感は「職員が見られない場面で遊んでもらえる」という期待に変化している。また、子ども達は2年間同じボランティアが活動に訪れることで、ボランティアの名前を覚えたり、活動曜日を楽しみにしたりといった変化が見られた。そ

表4 職員に対する聞き取り結果

質問項目	聞き取り内容
ボランティア活動	現在の印象 <ul style="list-style-type: none"> ・子どもの状態がまちまち(定期的に自宅に帰る、建物から出ることが少ない)→いい刺激になる(家庭なら、親がいるんな所へ連れていく) ・職員のやりたい気持ちもある ・職員の想像を超えた活動内容、できる範囲を超えて活動
	希望する内容 <ul style="list-style-type: none"> 学生 <ul style="list-style-type: none"> ・1対1で、じっくりと密な関わり→家庭と似た状況を作れる ・男性ボランティアは施設内に女性職員がほとんどなので貴重。父親的関わり ・続くと思っていなかった→不信感、がっかり感
学生ボランティア	印象の変化 <ul style="list-style-type: none"> 開始当初 <ul style="list-style-type: none"> ・ボランティアの希望は多いが1回のみ、見学のみであることが多い ・子どもは1度だけでもうれしいが、覚えられない 現在 <ul style="list-style-type: none"> ・2年間続いていることはすごいことだと感じる ・活動に来たのを見ると、子どもたちを見てもらえる、楽しませてもらえるのでほっとして安心する
	子どもの変化 <ul style="list-style-type: none"> ・ボランティアの名前を覚えた→継続して来ていることが要因 ・嬉しいと感じる
職員の变化	・多くの人が働いているが、ほとんど全員が知っている

のような子どもの様子から、病棟で働いている職員が活動に関心を持つようになった。現在では、ほとんど全員が、学生の顔やボランティアを行っているということを知っている。

4. 考察

齋藤らは、次のように述べている。「看護師は子どもの気持ちを大切に受け入れられやすいかわり方をしており、遊びが子どもの生活に欠かせないものにとらえ、関心も寄せているが、遊びに費やす時間は短く、遊びのための工夫や対応もあまり行っていない[中略]業務の多忙さ、遊び援助の最優先度の低さが背景にあるものと考えられる。」(齋藤ら,2010)。今回の調査でも、時間や人手など物理的な余裕がないため余暇活動の時間や内容を充実させることが難しいという意識があり、その点をボランティアに補ってもらいたいと期待していた。B大学生ボランティア受け入れ担当者は、これまでの学生ボランティアは活動を継続することが少なく2年間の活動継続に驚きを感じていた。また、子どもがボランティアの名前や活動曜日を覚えて活動を期待していること

や、大勢の職員が活動を認知する状況から1対1で密に関わりながら活動を行えることを評価し、大きな期待を寄せている。学生がボランティア活動を継続することで、子どもの情緒の安定や信頼関係の構築、職員間での認識や活動の認知だけではなく、活動への信頼と期待を高めることにつながったと言える。

III 全体のまとめ

谷川らは、「病院ボランティア活動は、一時的な「善意」よりも細く長く続けることが重要である」(谷川ら,2009)と述べている。

B大学生ボランティアが継続して活動を行えた要因は以下の2つが考えられる。まず職員と学生間で信頼関係を築けたことが活動の継続を可能にしたのではないだろうか。ボランティアに参加することで学生の意識に、職員の存在が大きくなっている様子がうかがえる。活動が継続することで、職員にも学生が自身の関わりきれない部分を補ってくれるという意識が芽生えた。立場は異なるが、互いを尊重することが継続して活動を行おう、あるいは受け入れようとする考えにつながるのではない

だろうか。

次に参加者の意識の変容が考えられる。2ヶ月間のボランティア活動を通して、活動の展開を考える視点が自身の興味関心から対象者の健康状態や、生活環境といった実態に向けられるようになり、この後も継続して活動している。谷川らが「病院ボランティアは単調になりがちな入院生活を送る患者にとって、病院の中であっても生活のリズムやメリハリにつながる重要な役割を果たしている。そしてそれは、患者にとって大切な日常生活の一部である」(谷川ら,2009)と述べているように、ボランティアによる関わりが対象者にとって重要なものであると同時に療育施設での生活で必要とされている関わりであることに気がついたことが活動を継続して行う意欲につながったのであろう。

受け入れ側の職員は当初学生ボランティアの活動継続に不信感を抱いていたが2年間活動を続けることで子ども達が活動を楽しみにするようになったことから、学生ボランティアに対して期待感や信頼感を抱いている。

病気療養児に対するボランティア活動の継続には受け入れ側と参加者側が対象者児に意識を向けて、互いに対象者児にとってより良い活動を考えていくことが必要である。活動継続による信頼関係の構築が病気療養児を中心に置いた学習支援を可能にすることが示唆された。

第4章 全体考察

谷川らはある入院児が元気がなく顔色も悪い理由を主治医は治療の影響と考えたのに対して、ボランティアは母親との関係だと考えたことについて、それぞれが自分の役割を全うしたために起きる意見の相違だと記している(谷川ら,2009)。病気療養児の体調と心理面は相互に影響し合うと言われている。文部科学省の「病気療養児の教育について」では「病気療養児は、病気への不安や家族、友人と離れた孤独感などから、心理的に不安定な状態に陥り易く、健康回復への意欲を減退させている場合が多い。病気療養児に対して教育を行うことは、このような児童生徒に生きがいを与え、心理的な安定をもたらし、健康回復への意欲を育てることにつながる」(文部省,1994)と記されている。先の谷川ら(谷川ら,2009)の指摘のように、病気療養児の療養、教育においては、それぞれの専門性からの視点での情報を共有する必要がある。

あり、学生ボランティアであっても、子どもたちの身体的な状態や環境だけではなく、心理的な状態にも目を向けることが求められる。

今回の調査研究で病気療養児が必要としている支援に学生ボランティアが気づくことができたのは、職員が学生ボランティアに子どもを意識した活動を求めるようになったことが影響していると考えられる。また、学生が教育学部で学び、特別な教育的ニーズのある子どもと接するための知識を有し、支援しようとする思考や態度が育っていたことも理由の1つであろう。

本研究では病気療養児に対する学生ボランティアには、学習支援による学習成果の向上や余暇活動の充実だけではなく、密接な関わりを通して子どもに寄り添い、心理的に支える役割もあることが明らかになった。今回、特別支援教育を学び地域連携実習等で経験も豊富な学生でも意識の変化には一定の期間が必要であった。今後、病気療養児の学習支援ボランティアを展開していく上で、特別な支援を必要とする子どもについての知識や関わった経験が少ない学生の参加も検討しており、病気療養児への学習支援ボランティアの養成について、予備知識や子どもの生活を見る時間など、どのような内容が必要であるかについて検討していきたい。

参考・引用文献

- 1) 土居正博(2011), 研究ノート 特別支援教育関係ボランティアの課題と解決の方途—プロセスレコードの活用の可能性—, 創大教育研究第21号, 171-182
- 2) 藤原志帆(2012), 病院ボランティアによる入院児の支援に関する考察: 小児医療における病院ボランティアの活動報告の分析をとおして, 熊本大学教育学部紀要 人文科学 61, 153-162
- 3) 福井里佳, 塩飽仁, 遠藤芳子(2002), 入院児, 家族を対象とした病院ボランティア活動に対するニーズと看護者の役割, 日本小児看護学会誌 Vol.11 No.1, 15-22
- 4) 今西誠子(2013), 入院時に付き添う母親の苦しみ, 京都市立看護短期大学紀要 第37号, 13-23
- 5) 伊藤良子(2009), 研究報告 入院時に付き添う家族の入院環境に対する満足度—質問紙による調査から—, 日本小児看護学会誌 Vol.18No.1, 24-30

- 6) 河井亨(2012), ボランティア活動への参加によって
学生の学習がどう異なるのか—全国大学生調査の分析
から—, ボランティア学研究 Vol.12, 91-102
- 7) 文部省初等中等教育局長通知(1994), 病気療養児の
教育について, 文部科学省
- 8) 小野次朗, 西牧謙吾, 榊原洋一(2011), 特別支援教
育に生かす 病弱児の生理・病理・心理, ミネルヴァ
書房
- 9) 齋藤美紀子, 高梨一彦, 小倉能理子, 一戸とも子
(2010), 研究報告 入院中の子どもの遊びの援助に
関する調査—遊びの現状と小児看護経験年数によるか
かわり方の違い—, 弘前学院大学看護紀要 第5巻,
35-45
- 10) 武田鉄郎(2006), 慢性疾患児の自己管理支援のた
めの教育的対応に関する研究, 大月書店
- 11) 谷川弘治, 駒松仁子, 松浦和代, 夏路瑞穂(2009),
病気の子どもの心理社会的支援入門 医療保育・病弱
教育・医療ソーシャルワーク・心理臨床を学ぶ人に,
ナカニシヤ出版
- 12) 谷口明子(2009), 長期入院児の心理と教育的援助
印が印学級のフィールドワーク, 東京大学出版
- 13) 全国病弱教育研究会編著(2013), 病気の子ども
の教育入門, クリエイツかもがわ

本研究を進めるにあたり、アンケート調査や聞き取り
調査にご協力いただいた A 療育施設、職員のみなさま、
そして、B 大学学生に感謝します。